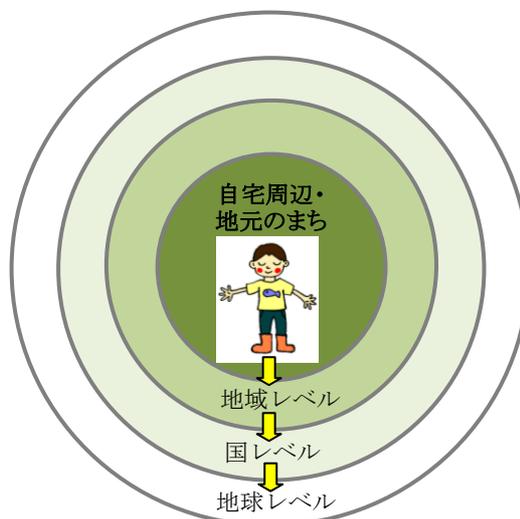


3. 自然観察を環境学習に役立てる

・環境とは、“身の回り”

現在、地球温暖化や生物多様性の保全など様々な環境問題や課題があり、マスコミでも話題になりますが、一般の人にとっては、それらについて関心を持つこと、実態を知ることはなかなか難しいところがあります。また、環境や環境問題というと、それらを単なる事柄として、あるいは自分とは関わりのないこととして捉えてしまいがちです。

しかし、自分の家の庭や自分が住んでいる地域の公園等で、自然観察を通じて身近な自然や生きものの存在に気づき、愛着を持つことができれば、その人の“身の回り”のこととして、環境を身近に意識できるようになります。



自然観察から“身の回り”を広げる

・自然観察で自然に気づき、自然を知り、自然を大切にする心を育む

自然観察では、自然の中で自分の目やその他の感覚を使って、自然や生きものの存在を実感できます。そして、生きものと自然のつながり、自然と自然のつながり、生きもの同士のつながり、人と自然のつながりを観察していくことで、今まで見えなかった自分と環境とのつながりやその先の広がりを知ることができます。例えば、干潟に渡り鳥が来ていることを知ることで、鳥をグローバルな生きものとして見るようになり、その渡り鳥が来る身近な干潟がグローバルなネットワークの中にあることに気づきます。それが、外国の自然にも関心を向けるきっかけになるでしょう。このような視点が、地球温暖化や生物多様性の保全に関心を持つ意識を養い、地球環境問題という壮大なテーマの一端を具体的に捉える、手がかりになるのではないのでしょうか。

また、自然観察は自然の仕組みを理解するだけでなく、自然に親しむ活動としてとても重要です。例えば、干潟とそこにすむ生きものに触れて始めて、それらを愛おしく感じる気持ちや、畏敬の念が芽生えます。そして“身の回り”として、守りたいという気持ちが育まれます。

自然観察は、環境や環境問題を単なる事柄として済ませるのではなく、環境(自然)をかけたがえのない存在として意識する気持ちを育みます。



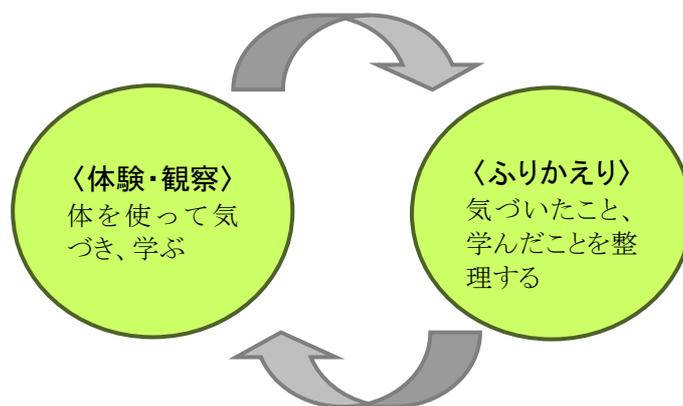
環境学習が目指す段階的な目標の例

自然観察は、各段階の目標に応じて活用できる。

・自然観察で自然を実感し、環境への理解を深める

環境問題について学習するとき、インターネットを使って情報を集めて終わり、ということになっていないでしょうか。それだけでは抽象的な理解だけになってしまいます。例えば、干潟とはどのような場所なのか、自然観察をして気づいたことを整理することで、実感を伴った理解ができます。鳥をはじめ、様々な干潟の生きものがそこでどう暮らしているかを、自分の目や他の感覚を通じて体全体で感じ取ることによって、干潟という環境が具体的に想像できるようになります。

また、自然観察というと、生きものを観察して名前を調べるだけで終わっていないでしょうか。生きものと環境のつながりを観察し、観察したことから何がわかったのか、何に気づいたのか、しっかりふりかえることで、生きものたちが発する環境についての様々なメッセージを整理し、受け取ることができます。そうすることで、単なる生きもの観察ではなく、環境学習として理解を深めることができます。



体験とふりかえりの関係

体験した後はふりかえりを行う。その結果をもとに、再び体験や観察をする。このように循環していく。